

闘いの構図

(上)

青山光二

獵銃、短銃を亂射して

千八百名の大亂

鶴見に流した鮮血

昨夜十時遂に準戒嚴

川口電報の報ずる川口縣見町湖田の赤鉢工部局に於ける本谷秀組、本谷秀
は、湖田にいたり細々と湖田の度を諦め、本谷武雄などを擧げて臨み合ひ
となる。本谷秀組一千名は赤鉢に赤鉢巻を
尾組八百餘名は白鉢に白鉢巻をなし、
水盗を交して、細々と湖田の度を諦め、湖田の
湖に近き湖田を布いて、獵銃、ピストル等を亂射
力を持て入り亂れ争闘し、多量の死者を出した
つては形勢いよく、險惡となり、遂に死傷

闘いの構図 (上)

青山光二

新潮社

闘いの構図 (上)

昭和五十四年七月十日 発行
昭和五十六年八月二十日 六刷

著 者 青 山 光 二
あおやま こうじ

発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二 東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(三六五一一) 振替東京四一八〇八
編集部(三六五四一一)

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 新宿加藤製本

定価 一二〇〇円

© Kôji Aoyama, Printed in Japan, 1979

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信保宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

闘いの構図
(上)・目次

第一章 発端 5

第二章 決裂 55

第三章 対峙 119

第四章 集結 185

第五章 激突 263

装帧·辰巳四郎

闘
いの
構
図
(上)

第一章 發端

「東京電力の鶴見の発電所を、うちで工事することになったんでね、きみは両方全部、よくやってるようだから、ひとつ、そっちの方、ひきうけてくれないか」

工事長の森山権八郎が、持ち前のぶっきらぼうな口調で、こう切り出したとき、杉山組の組長杉山年蔵は、即座に、「よろしゅうございます。やらせていただきます」と答えたものだった。

大正十四年八月十五日、東京丸ビルの合資会社志水組本店工事部室でのことである。

志水組の森山工事長が「両方全部」といったのは、薦・土工の両方の工事、という意味である。京浜地区の大川町埋立地へ正確にいえば、神奈川県橘樹郡大川町、東京湾埋立地四号に建設される東京電力株式会社東京火力発電所の建築工事を志水組が請負うことになったので、薦・土工関係の工事を杉山組にやらせようというのが、森山の話の内容だ。杉山組は、もともと、志水組の下請系列にある、薦・土工専門の土木建築請負業者であった。

だから森山は、自分が仕事の話を持ち出せば、いやもうもなく杉山が同意して、承諾するだろうという結果を、少しも疑ってはいない。なかば事務連絡のような話し合いであった。

「きみも金があるだろうから——」と森山が云って、事務機の抽斗から、用意してあった紙幣束を無難作に取り出した。「とりあえずこれだけ、持っていきたまえ」

「それはどうも、おそれいます」
机上に置かれた紙幣束は、五百円であった。杉山年蔵は、受取りを書いて一礼し、紙幣束を懐中におさめた。

森山工事長が念達金の意味で五百円の金を仮払いしたことは、そうと説明されずとも、杉山には、のみこめていた。土地の顔役に念達を通さなければ、土建業者が仕事にかけないのはどこの地区でも同じことであったが、とりわけ川崎市を中心に、それに隣接する大川町・鶴見町といったの、いわゆる京浜工業地帯は、同業の木谷秀組が強固な地盤をもち、旺盛な勢威をふるっている土地柄であった。木谷秀組に念達をつけることなしには、ここで建設工事を完成することはおろか、手をつけることさえ不可能なのである。不合理であり理不尽な仕儀であったが、それはもはや業界の既成通念であり、常識でもあった。この通念・常識は、木谷秀組がドス黒い力と血でかちとったものであった。本来、東京の業者である杉山組が京浜地帯へ進出したのは、関東大震災で被害をうけた富士瓦斯紡績川崎工場の復

旧・増築工事を元請の志水組から請負ったのがきつかけであつた。震災の翌年のことである。当時三十七歳、氣鋭の杉山年藏は、木谷秀組との一戦をも辞せずの覚悟だつたが、結果は、どうやらぶじに工事をおえることができた。爾来一年余、ライジングサン石油、日清製粉鶴見工場など、大工場の薦・土工事を志水組の名義人として、つぎつぎと請負い、杉山組は業者として京浜地帯に、ようやく確乎とした地盤をきずくにいたつてゐる。護岸工事や、震災で損壞した工場の修復工事もあつて、仕事が切れるということとはなかつた。

鶴見町潮田にある杉山組事務所は、年藏の義弟杉山美代吉へ妹寿以の夫があずかつてゐた。事務所は、むろん、美代吉夫婦の住まいを兼ねてゐた。ところで杉山美代吉は、木谷秀組の実力者長岡孝四郎と兄弟の盃をして、その舎弟分になつてゐる。長岡孝四郎は、木谷秀組の頭領金井秀次郎の一の乾分であるが、組の実権を掌握しており、無理が通れば道理ひっこむを地で行つて、その勢力は親分をはるかにしのぐものがあるという人物だ。杉山年藏も、義弟美代吉と長岡孝四郎との盃事については、万事承知の上、というよりむしろ義弟を慫慂して、事をはこばせた形跡さえあつた。京浜地区で土建業の門戸を張つていく上に、この縁組が有力な支えになることは、火を見るよりも明らかだつたからである。

丸ビル六階の志水組本店を出た杉山年藏は、その足で、

鶴見の事務所へ行つて美代吉に、森山工事長から請けてきた仕事の内容を伝達することにし、目の前の東京駅の方へ歩きだした。西巢鴨町池袋に、自宅を兼ねた杉山組本店事務所があつたが、いまはのんびりしてゐるときではなかつた。いったん帰宅してから出直すという心の余裕がなかつた。

昨十四日、森山工事長直属の下僚である飯田達之から電話で、明朝九時までに本店へ来られたい、と云つてきたとき、何か仕事の話だろうとは思つたが、まさか東京電力の工事だとは、杉山は予想もしなかつた。

東京電力東京火力発電所の基礎工事は、すでに、その一期工事を塙組が請負い、潜函工事・水路工事などが、かれこれ完了する頃だときいてゐる。というのは、美代吉の方からも、薦工を何人か、大川町の現場へ送りこんでゐるのである。杉山組の職人が塙組の現場へはいつてゐるのは、この工事の仕立人が、塙組理事長長谷川正の信任あつた木谷秀組の長岡孝四郎だからであつた。前述のように、長岡と杉山美代吉は兄弟分である。

(基礎を塙、建屋を志水、とこういうわけか……)

京浜線の電車の座席に腰をおろした杉山年藏は、白い麻の背広の腕を組んで、そうつぶやいた。眉の濃い、鼻下に髭のある、顎の張つた顔は、内心の緊張をあらわして、上質のバナマ帽子の下で、まっすぐに据えられてゐる。どちらかといへば柔和な感じのする目に、強い光が湛えられてゐた。真夏の陽はようやく高く、ジリジリと焼くように彼

の背に照りつけていた。

基礎工事と建築工事の請負人が、それぞれ別個の業者であることが、まず、少しばかり、彼のあたまにひっかかったのだ。しかし、この建設工事の場合、基礎と建屋の建築が、別個の入札対象になっているらしいから別の業者がそれぞれを請負うことになるのは充分ありうる現象で、異とするに足りないのかもしれない。また、このような前例がないわけでもなかった。杉山が今後の事態に何ということなく不安をおぼえ、危惧の念を禁じえないのは、実は、基礎工事の仕立人が長岡孝四郎だという点からきていた。

長岡が采配をふるって、完工を急いでいる基礎工事は一期工事であらう。そのあとの整地（土工）・鉄骨組方・足代（鷹）といった仕事を杉山組が担当することになるのだが、あの長岡が、いままでおさえていた現場を、すらすらと明け渡して、後へ引くだろうか、いや、話は何とかつくにしても、何としてでも、話はつけなければならぬが——さきゆき、こいつは容易なことではあるまいと、こまかく頭のはたらく、思慮深い性格の杉山年蔵は、大きな仕事を元請からもらったよろこびとは別に、われ知らず、浮かぬ表情になるのであった。が、それにつけても、義弟の美代吉が、長岡と兄弟関係をむすんで、現におなじ現場で顔を合わせていることは、今後の交渉になにかと都合な条件となるに相違ない、と彼は心につぶやいた。

杉山年蔵が、神経過敏と思えるほど長岡孝四郎の存在に

こだわり、懸念を抱くのは、長岡が背負っている木谷秀組の京浜地帯での勢力を、ただ漠然と怖れるからのことではなかった。現実には、ここ半年のあいだにも、木谷秀組が暴力的威圧によって同業者の仕事を強奪するという事件が、二度ならず三度までも、つぎつぎと起こって、業界の語りぐさとなり、しかも、それが、さらに木谷秀組の威力を増大させるという困った結果になっているからであった。そして、それらの事件を惹き起こした木谷秀組の暴力の中心にいるのが長岡孝四郎なのであった。

その三つの事件というのは、概略を述べると、つぎのようなものである。

(一) 大正十四年四月——、大川町埋立地にある日本ヒューム・コンクリート会社の構内人夫・水揚人夫の供給を回漕業熊坂組へ横浜市岡野町一五番地、熊坂熊吉が請負っていたが、これに目をつけた木谷秀組では、配下の柴野三卯ほか数名に命じて、熊坂組潮田出張所主任市原誼之ほか一名を殴打し、暴力を加えしめた。その上で、熊坂組及び日本ヒューム・コンクリート会社の関係者を脅迫して、この供給事業を熊坂組から奪取した。

(二) 株式会社芝浦製作所が鶴見町潮田に新設した鶴見分工場では、その構内人夫の供給を、東京本工場の人夫供給請負人小泉千里に特命し、本工場同様、人夫一人一日金一円六十五銭で請負わせた。そこへ割りこんできた木谷秀組は小泉千里及び芝浦製作所の関係者を脅迫して、

人夫一人一日二円二十銭に増額させた上、小泉を形式上の名儀人とし、同人からこの供給事業を取り上げた。やはり大正十四年四月頃のことである。

（三）六月になって、芝浦製作所は、二円二十銭という賃金の減額を企てた。すなわち、木谷秀組に通告を発して、構内人夫供給事業をその手から取りもどし、鶴見町の合資会社小野運送店に請負せると同時に、賃金を人夫一人一日一円七十五銭と定めたのである。小野運送店では、人夫供給請負業小林兼吉へ鶴見町潮田一九九四番地への取扱いにより、六月十五日から、同製作所鶴見分工場へ所用の人夫を供給することとなった。ところが木谷秀組は、ふたたびこの仕事を自己の手中に取り戻さんものと画策し、十五日、配下鶴見卯三郎の実弟、里見留五郎に小林兼吉暗殺のことを指令した。里見は短刀を持って小林兼吉に斬りかかったが、小林の帯同していた人夫頭佐藤忠吉が身をもって阻止しようとしたため、これを殺害してしまった。その隙に小林は逃れ去ることができたが、木谷秀組の暴力に対する恐怖は骨身に徹した。事件を聞き知った小野運送店としても同様であった。両者は木谷秀組を恐れる余り、芝浦製作所鶴見分工場への人夫供給事業を放棄する気になったのであったが、仲裁者があって、けっきょく、事業のうち四分を小野運送店へ小林兼吉扱い、六分を木谷秀組が運営することになった。強奪せられたのといいて変りはない結果であった。

木谷秀組の余りにも傍若無人な横暴ぶりに、同業者間でも、憤激・非難の声を放つ者は少なくなかった。それらの声は、当然、張本人の長岡孝四郎の耳にもとどいていた。しかし蔭で木谷秀組攻撃の口吻を洩らす者はあっても、その圧倒的な勢威の前に、正面きって物云いをつけたり、反抗の態勢を示したりする勇氣は誰しも持ち合わさないのであった。それが、木谷秀組の乱暴で身勝手なやり口を、ますます助長する結果となっていく。

木谷秀組の頭領金井秀次郎は、かつて関東いちえんに勢威をふるった博徒の大親分「半鐘兼」こと堀井兼吉の後継者として、その土木方面の縄張りを引き継いだ堀内末次郎の乾分である。長岡孝四郎、中田善一郎を両翼に、楠原吉蔵以下数十名の幹部を従えた彼は、隸属する数百名の土工を配下とし、つとに「木谷秀組」を名乗って、京浜地区で土木人夫供給請負業をはじめた。木谷秀組が、無人の広野を行くごとく勢力を伸ばし、龐大な土工団体を統御する組織にふくれあがったのは、あつという間の出来事であった。この現象については、むろん、京浜地区の一大工業地帯としての急速な発展という時代的背景があった。東京湾に臨む広大な埋立地へ浅野総一郎の手で大正三年に開始された鶴見を中心とする埋立地の造成は、のち昭和六年に至るまで継続され、その埋立総面積は百八十万坪に及んだを包容し、海陸の運輸交通至便という好条件から、この地域に続々と各種大工場が建設される活気横溢の気運となった

のは大正七、八年頃からである。第一次世界大戦後の財界の好況という経済史的現実を反映するものであった。新規の大規模な工事はつぎつぎと起工され、土木建築請負業者の絶好の営業地としても、そこは、同業者間の注目の焦点となった。そして、工事関係の輻輳がはげしくなるにつれ、しだいに、業者同士の反目・競争、嫉視・暗闘を生じ、こゝろなると、力と力の勝負、強いものが勝つという殺伐きまわる、無政府的な風潮が醸成されるにいたった。しかし、争ったところで、強大を誇る木谷秀組の実力に拮抗しうる者はなかった。時には木谷秀組に対抗し、その勢力や縄張り蚕食せんとするとき態度に出る者もあったが、たちまち逆に圧倒され、おしつぶされるという具合で、いつしか、同業者や工事関係者のあいだには、木谷秀組に対し賦金・念達金の類いを提供して事業上の援助を懇請し、その庇護の下に辛うじて工事の完成を期するという風習が生じ、それが固定化していったものである。

そのように強大・無敵な木谷秀組の実力の中心は、つとに金井秀次郎ではなくて長岡孝四郎であったが、木谷秀組の親分が金井であることには変りはない。だから金井は金井で、頭領として統轄するかたちとなる勢力圏だけは、いやが上にも増大していかなざるをえないのである。例えば——同業者のみならず、土建関係以外の地元の各種営業者の中にも、木谷秀組に加盟し、その勢力を背景とすることにによって、営業の安全を図ろうとする者が少なくなかったの

で、木谷秀組では、時機を逃さず、さらに加盟者の数を飛躍的に増やすために『木谷秀睦会』と称する団体を創設し、鶴見・川崎地区に各数百名の加盟者から成る四個の睦会を組織した。そして、実態は長岡孝四郎がその中心にいる暴力によってつくりあげられた四個の睦会を、名目上統御する会長は金井秀次郎であった。

木谷秀組の地盤は強固となるばかりで、京浜地区では、少なくとも各種工事の人夫供給等の事業は、ことごとくその手中に帰したといっても過言ではないくらい、木谷秀組が独占するにいたっていたが、そのように急激な成果を木谷秀組にもたらした功績といえは功績は、ひとえに長岡孝四郎に帰せらるべきものであった。それだけにまた、ふくらむだけふくらんだ長岡の自持はただならず、勢いに乗って、ことさらに同業者を威嚇し、その営業を圧迫するという、前述のような事件も生じてくるという次第であった——。

省線鶴見駅に降り立った杉山年蔵は、木造の駅の建物を出ると、真昼の炎天の下を、鶴見川べりへ向かって歩きだした。小柄だが、がっしりと肩の怒った上体を、反りかげんに立てている。駅前に一ト区画かたまつて軒をならべている商店の集落を出はすれ京浜電車の線路を越えると、あとは、葦の生いしげった原っぱに、ちらほらと人家が散らばっているだけだ。

間もなく、国道の向うに鶴見川の流れが見えてきた。そ

れは、キラキラした陽光を、こまかく碎いて撥ねとばすように、照り返していた。鶴見川は、彎曲しながら横浜港に向かつて流れ、三千メートルばかり先に、川口をひらいている。

上衣の背が、ぐっしょり、汗に濡れているのに杉山年蔵は、ふと気づいた。流れるような汗を拭くことさえ、彼は、このときまで忘れていた。にわかに、炙るような暑さが襲いかかつてきた。六、七十メートルの長さの潮見橋を渡りながら、（美代公、事務所にいるかな？）

彼はつぶやいて、上衣をぬぎ、脇にかかえた。義弟の美代吉とは、しばらく会っていない。

山のような荷を積みあげた馬力が、橋板を鳴らしながら近づいてきた。瘦せこけた馬は、首を垂れ、やつとのこと荷を曳いている。馬方も上半身裸かだ。

潮見橋を渡って、まっすぐ行けば本町通り、左へ斜めに折れる道をしばらく行くと潮田へ出る。潮田神社の先に、杉山組の事務所があった。

浴衣の裾を端折り、襷がけで、白く乾ききった道路に水を撒いていた女中のいねは、足早にやってくる杉山年蔵の姿を見ると、人なつこい笑顔になって、ぴょこんと頭をさげるなり、バケツを置いて、門の中へ活潑な動作で駆けこんでいった。

門をはいった正面の硝子戸を開けると、広い感じのする玄関の土間で、左側が四坪ばかりの三和土の事務室、右手

が八畳の座敷になっている。事務室の奥に、板戸を境に六畳、さらに襖で仕切って四畳半が、一ト並びにつながっていた。六畳の部屋は三人の同居人へ神山長五郎、杉山六次郎、関東市への寝場所であり、四畳半には、いねが寝るのだ。玄関から半間幅の廊下が奥へ伸びており、これが、同居人たちの部屋と、主人公杉山美代吉夫婦の居間兼寝室である八畳の座敷とを隔てていた。八畳の座敷の裏手に、板の間と土間が半々になった台所がある。

事務室の隅の事務机に向かって算盤の音を立てていた帳方の杉山六次郎は、手をとめて穏和な長顔を振り向け、開け放したままの扉口をはいってきた杉山年蔵に、

「やあ、兄さん、いらっしゃい」

と笑いかけた。ことし二十七歳の六次郎は、年蔵の実弟に当たる。

「忙しそうだな。どうだ、元気にやってるか」年蔵は、やさしい兄の顔になって、云った。そして、

「美代公、いるんだろ？」

「いるよ。さっき、現場から戻ったとこだから——」

六次郎が腰を浮かしたとき、廊下から玄関へ降りてくるいねの姿が見え、「いま来ます」と、いきいきした声で云った。美代吉を呼びに行ってきたのだろう。椅子に腰をおろし、バナマ帽子をぬいで汗を拭いていた年蔵が、声をかけた。

「いねちゃん、すまねえが、水を一ぱいくれ」

「はう」

もう一度、廊下へあがつて、奥の炊事場へ駆けこんだ。ねは、やがて、大きなコップに満たした井戸水を、こぼさないように両手で持ち添えて、三和土へ運んできた。うけとった年蔵が、一ト息に飲みほすのを、傍に立ったまま、いねは見まもっている。もう一ばい、と云われるのを待っているのだ。どうやら、東京の親方の用を足すのが嬉しくて仕方がない様子だ。

「座敷の方が、いくら涼しいよ、兄貴」

と胸膈声で呼びかけながら、そのとき、でっぶり肥った大男の杉山美代吉が三和土へはいってくると、やっといねは、年蔵の傍を離れて、バケツを置き放してある道路の方へ、また、出ていった。袖なしのシャツに半ズボンという恰好の美代吉は、うたた寝でもしていたらしく、シャツがまくれて、出っ張った腹部がまる出しになっている。

「ここは照り返しがひどくて、たまらねえ。さあ、向うへ行くぞ」

と、立ったまま云ったが、

「美代公、今日はゆっくりしていらねえんだ」

まあ坐れ、と目顔で促されて、義兄と対い合わせの椅子に尻をおとした。カラのコップを丸テーブルに置いて、年蔵が、「お寿以はいねえのか？」

「金がない金がないって、年じゅう、こぼしやがるから、どなりつけてやったら、顔色かえて、とび出していきやがった。どこへ行ったんだろう。なあに、すぐ帰ってくるよ。」

氣ばかり強くって仕様がねえ」

「威勢がいいな、お前たちは」

年蔵は苦笑いした。こまったもんだ、というほどの氣持で、べつだん義弟の話の内容を深く気にするということはなかった。土建請負業は割のいい稼業だったが、美代吉は年蔵の代人格、いわば支店長にすぎないから、名義人なりに金が浮かないのは当然である。それに美代吉は、きれいに人を使う方であった。世話役や若い衆の前金の無心など、氣前よくきいてやる。しぜん、手元不如意になりがちなのを、苦勞知らずに育ったお寿以がぼやくのだろうと、一家を統率する兄らしい思い遣りを、年蔵は、心にうかべるのだった。お寿以は彼の、すぐ下の妹だった。

六次郎は、帳簿を片寄せて、ぶらっと出ていき、いねもバケツをさげて、裏の井戸端の方へひっこんだ様子だ。

義兄年蔵の話で、東京電力東京火力発電所の鳶・土工事いっさいを杉山組がやることになったと聞かされると、杉山美代吉は、そいつはよかったとよろこんで、カイゼルまがいにとびんと撥ねた鬚を生やした、道具立ての立派な顔をほころばせた。そして、

「志水組じゃあ、四、五日前から、現場主任が先乗りでやってきて、仮事務所をつくりにかかっているよ」

「現場主任が？ 誰だい、そりゃ」

と年蔵は、つかっていた扇子を一瞬とめて、云った。

「ほら、柄は小さいけど元氣のいい……、何ていったかな」

「下田節二？」

「それそれ！ その下田主任が、機械工を二、三人つれてやってきて、現場の下調べをやってるらしい。なにしろ、地盤がわるいからね」

大川町あたりの埋立地は、二年前の大地震のとき、各所にできた地割れから水が噴きあげたという、いわくつきの土地である。

「しかし、地盤がどうのこうのって、塙組がもう潜函（ケンゴン）を入れちゃってるんだろ？」

「塙がやってるのは、発電機を動かすタービンの基礎だ。機械場の基礎工事だよ。しかし、出力三万五千キロワットのタービンを二台も据えつけるってんだから、基礎について、どえらい工事だ」

「……そうか、建物の基礎じゃないのか」

年蔵は、やっと納得がいった、という顔になった。発電所の心臓部ともいべき蒸気タービンの基礎工事が、塙組の手で、先ず施工されているのであった。美代吉がさらに説明したところによると、この蒸気タービン二基の基礎工事と水路工事へ汽罐へ水を取り入れる取水路と、仕事を終った蒸気が冷やされて水になったのを放出する放水路との造成とが塙組の請負内容であった。それらの工事を塙組が東京電力から請負ったのは大正十四年七月である。発電所の建物自体の建築工事は、基礎工事をふくめて、これから新規に着工されるわけである。そういうことになる、と

火力発電所という特殊な建築物に優秀な実績を持っている志水組が指名されるのは、むしろ当然であった。施主の東京電力が、発電所の建築は志水組に限る、と考えたとしてもふしぎはない、と杉山年蔵はつぶやくのだった。

というのは、志水組では、つい最近、東京電燈株式会社の千住火力発電所建設第一期工事を完工したばかりであった。それも、延坪二千五十七坪の大建築物を、昼夜二交替制の突貫工事で、契約の工期よりはるかに早く、二十九月たらずでみごとに完成し、未曾有の施工速度を記録したので。やはり森山工事長の担当であり、工事主任は飯田達之・岸高武、現場主任が下田節二であった。すなわち、火の玉男という呼称がびったりな森山権八郎の率いる強力なスタッフが、千住火力のときの態勢のまま、東京火力発電所の建設に臨もうとしているのである。

志水組本店には、森山のほか、七名ほどの工事長がおり、それぞれの工事を率いていたが、名実ともに森山工事が、他をひきはなす精鋭であり、社内のみならず全建築業界の花形でもあった。森山工事部の総員は六十余名であった。通常の建物とちがって、格段に重量の重い鉄骨を使用する発電所工事は、鉄骨の操作だけでも、相当な経験と熟練を必要とする。千住火力の工事現場で鍛えあげた腕に燃りをかけるようにして、大川町埋立地の工事現場へ早くも乗りこんでいる下田現場主任の、小柄だが責任感のかたまりみたくに張りつめた相貌・姿態が、杉山年蔵は、目に見え